

秋本病院は、初代の徹院長（現理事長）により、昭和 21 年 福岡市に外科医院として開業した。53 床の病院へ規模を拡大して以降、博多の住民なら誰でも知っている、まさしく「地域かかりつけの病院」として多くの患者を受け入れてきた。

2 代目となる亮一現院長は、施設老朽化、医療機能の見直しに伴いリニューアル構想に着手した。構想から 5 年、平成 16 年 12 月 25 日、めでたく竣工式が執り行われ、多くの関係者が祝杯を挙げた。

情報システム構築の関係者もさることながら、建設関係者は最後の追い込みに昼夜を徹し、一時は不可能とさえ言われていたスケジュールを見事に消化し、大喝采を浴びていた。

民間病院にとって、何億もの資金を投じる移転新築計画は一世一代の大勝負である。院長は、もう何日もろくに寝ていない、疲れたご様子ではあったが、「これから死ぬまで休まずに働かねば！」と、満面の笑みである。

この新秋本病院には“おもしろい(?) 企画” が盛り込まれているので、いくつかご紹介したい。

● プロジェクトチーム

50 床とあなどるなかれ、計画初期の段階から、院長の福岡県立修猷館高等学校バスケ部の後輩や同窓仲間が一瞬にして強力なプロジェクトチームを組んだのである。(株) 志賀設計社長、(株) 環境デザイン機構社長、弊社社長が打合せに顔を揃え、ソフト・ハード両側面から専門的な意見を加えながら、具体的な形に仕上げていった。

● 建物

建物を外から眺めると、広いガラス窓や足元の明り取り窓から、カラフルなオブジェの色に目が留まる。

1F エントランス壁面のミニギャラリーには、古い手帳や医学書などが展示されている。現理事長が外科医院を開業した当時に活用していた思い出の品々である。

施設内は、天井まで及ぶ広い窓で外光をたっぷり採り入れており、非常に明るい。

● 電子カルテ

限られた予算の中、本格的な電子カルテを導入したいという院長の要望に対して、最後まで応えてくれたのが大新技研(株) だけであった。

設計段階では、ほぼすべての打合せに院長自らが出席し、理想的な電子カルテの仕様をまとめ上げた。この結果、大規模病院のシステムに見劣りしない機能と小規模病院ならではの小回りのきいた電子カルテが完成した。

● 病室のブラインド

各個室は、入口のところに布のブラインドが垂らされている。意匠の一つかと思っていたが、実は、このブラインドの長さや位置の工夫によって、ドアを開け閉めする時でも廊下からはベッドの患者の上半身は見えず、逆にベッドの患者からは廊下の様子が伺えるようになっている。患者に配慮したちょっとした目隠しアイデアである。

● スタッフユニフォーム

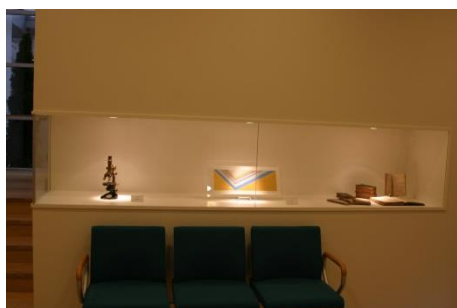
看護師を初めとするスタッフのユニフォームには、アメリカ産まれブランドを採用した。スタッフが自分の好きなプリント柄を自由に選び仕立てるといふ珍しいものである。ゆったりとしたスタイルで、全面にプリント柄がカラフルに飛び交い、院内が更に彩りよく見える。

● **ホスピタルデザイン**

デザイン事務所は、新秋本病院のためにカラフルな什器を新たにデザインした。ユニークな形状のデザインは、市内のギャラリーでも“ホスピタルアート”として展示され、現在は、院内の廊下やホールに配置され、来院者に利用されている。

● **職員研修**

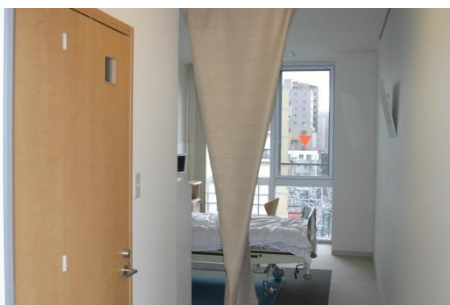
(株) 薫陶塾が、医師への患者との対話や接遇に関する教育研修をスタートしている。模擬患者を使って医師の個人授業を実施しているそうである。



ミニギャラリー



明り採りの窓と カラフルなオブジェ



病室入口のアイディアブラインド

使わない時は、写真のようにマジックテープで簡単にまとめることができる



病院のためにデザインされたスツール



ホスピタルアート（ギャラリーにて）

個性的なユニフォームやサインデザインも展示されている

